れきはく見どころクイズラリー 答え合わせ・解説

1

平安時代の出雲大社本殿模型は１／１０の大きさです。実際はどのくらいの高さがあったと伝えられているでしょうか？

答えは「ウ」です。

平安時代の出雲大社本殿は16丈（約48m）の高さがあったともいわれています。



2

平安時代に書かれた、貴族の子どもたち用の教科書であった『口遊』という書物があります。そのなかで、日本で最も大きな建物と考えられていた出雲大社は、何という言葉で書かれているでしょうか？

答えは「イ」です。

『口遊』には、当時の大きな建物について「雲太、和二、京三」と書かれています。これは、大きい建物を順番に表した言葉で、「雲太」は出雲大社（島根県）、「和二」は東大寺の大仏殿（奈良県）、「京三」は平安京の大極殿（京都府）のことだと考えられています。当時の大仏殿は、高さが約45mもあったとされていますが、それよりも出雲大社の本殿のほうが高かったと考えられています。



3

江戸時代の初めまでの出雲大社は、神社と寺が合体したような境内でした。その当時の出雲大社の復元模型を見てみましょう。寺に関係する建物のうち、出雲大社に建っていなかったのは何でしょう？

答えは「ア」です。

このころ、出雲大社には三重塔と鐘楼がありました。その三重塔は、兵庫県養父市の名草神社に移され、今でも見ることができます。また、出雲大社にあった鐘楼の鐘は、福岡県福岡市の西光寺に移されました。この鐘も、今でも見ることができます。三重塔は国の重要文化財に、鐘は国宝に指定されています。



4

奈良時代、全国 60 数か国で『風土記』が作成されましたが、現在まで伝わっているのは、『出雲国風土記』を含め、全部で何か国でしょうか？

答えは「ア」です。

風土記は、奈良時代の713年に朝廷が各地へ命じて作らせたもので、現在までまとまった形で伝わっているのは、常陸国（茨城県）、出雲国（島根県）、播磨国（兵庫県）、肥前国（長崎県・佐賀県）、豊後国（大分県）の5か国だけです。その中でも、ほぼ完全な形で伝わっているのは『出雲国風土記』のみです。



5

奈良時代に書かれた『出雲国風土記』は、本のように綴じた形ではなく、この復元品のように巻物でした。では、全部でどのくらいの文字が書かれているでしょうか？

答えは「イ」です。

『出雲国風土記』は上下２巻の巻物だったと考えられており、合わせて約17,000字で書かれています。その内容は土地の名前の由来、神社、山や川、動物や植物、交通路など多くのことにわたっており、奈良時代の出雲国の様子を細かく知ることができます。



6

「朝酌促戸の市」模型は、奈良時代の市場の様子を再現しています。次のうち、市場で売っていないものはどれでしょうか？

答えは「ウ」です。

『出雲国風土記』には朝酌促戸という場所で市場が開かれていて、朝酌がある嶋根郡では「志毗（マグロ）」「石華（カメノテ）」「鎮仁（クロダイ）」をとることができると書かれています。模型の中にある「鮑魚（乾しあわび）」「紫菜（乾しのり）」などは、『出雲国風土記』に書かれている内容や、同じ時代の遺跡で見つかった出土品から再現しています。



7

「青銅器」は、青っぽい色のイメージがありますが、それは長い年月の間に付いたさびの色です。作られた当時の、さびる前の元の色は何色をしていたでしょうか？

答えは「ア」です。

「青銅」は、銅を主な材料にして、錫や鉛などを混ぜて作る金属です。青銅器は、青銅を熱で溶かして、型に流し込んで作ります。混ぜる金属の量によって、青銅の色は変わります。錫が多いと白っぽい銀色になり、少ないと赤っぽい銅の色になります。



8

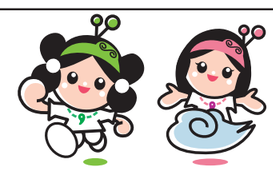
加茂岩倉遺跡から出土した銅鐸には様々な生き物が描かれています。銅鐸をよく観察してみてください。次のうち、描かれていないのはどれでしょう？

答えは「イ」です。

加茂岩倉10号銅鐸の「鈕」といわれる銅鐸の上にある持ち手の部分に「ウミガメ」が、加茂岩倉35号銅鐸の胴体の右上の四角い枠の中に「シカ」が描かれています。荒神谷遺跡出土の銅剣と同じように加茂岩倉遺跡出土の銅鐸の鈕にも「×」が刻まれたものもあります。



つぎのページに答えのつづきがあるよ！



9

この展示ケースの中にある三角縁神獣鏡という鏡には、昔の中国の年号が書かれています。この鏡を中国からもらったのは誰だと考えられているでしょうか？

答えは「ア」です。

神原神社古墳から発見された三角縁神獣鏡には「景初三年」という文字が書かれています。「景初」は昔の中国にあった「魏」という国の年号です。「景初三年」は邪馬台国の女王・卑弥呼が魏に使いを出した年（西暦239年）にあたります。



10

奈良時代には、各地の特産品を税として平城京（当時の都）に納めていました。荷物にくくりつけていた荷札木簡には、隠岐国の人たちが持って行った品物が書いてあります。何を納めていたでしょうか？

答えは「ア」です。

税として納める品物に付けられた荷札である木簡には、税を納めた土地の名前、氏名、納めた品物とその量、納めた年などが書かれています。隠岐国の人々は、海産物である「海藻（ワカメ）」「鰒（アワビ）」「螺（サザエ）」「烏賊（イカ）」などを税として納めていました。



11

ここには、歴代力士の中で最も背が高かった安来市出身の力士、大関・釈迦ヶ嶽の等身大の絵が描かれています。身長は何ｍ何㎝あったといわれているでしょうか？

答えは「ウ」です。

島根県は、相撲と深いつながりがある土地です。隠岐には昔から「古典相撲」という相撲の文化があります。かつて出雲国にいた「野見宿禰」という人が、大和国（奈良県）で「当麻蹴速」という人と力くらべをした話も有名です。江戸時代の松江藩には釈迦ヶ嶽という力士がいました。釈迦ヶ嶽は大関までのぼった力士で、身長は約2m27cm、体重は約180kgもあったといわれています。



12

ここには、昭和2年（1927）に造られた「デハ１形」という電車の一部を展示しています。昭和２年に運転されはじめてから、どのくらいの間、実際に線路を走っていたでしょうか？

答えは「ウ」です。

「デハ１形」は昭和２年（1927）に造られて、平成８年（1996）まで実際に線路で走っていました。



13

宍道湖の南には、メノウという宝石がたくさんとれる「花仙山」という山があります。この山のまわりの地域は、古墳時代に、日本の中でとてもたくさんの玉（古代のアクセサリー）を作っていた場所の一つでした。ここではその名残を伝える土地の名前が今も使われています。それは何という名前でしょうか？

答えは「ウ」です。

松江市玉湯町は、玉造温泉で有名です。玉湯町に流れる玉湯川のまわりには、かつて玉を作っていた遺跡がたくさんあります。「出雲玉作史跡公園」には玉を作っていた工房と考えられる昔の建物が復元されています。

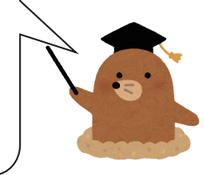


14

17世紀初めごろ、石見銀は、日本から世界へ輸出される銀のかなりの部分を占めていました。では、世界全体の銀の産出量のうち、日本の銀はどのくらいの量を占めていたでしょうか？

答えは「イ」です。

石見銀山は、銀をとっていた鉱山です。石見銀山遺跡は、平成19年（2007）に世界遺産に登録されました。昔、石見銀山でとれた銀は、貿易によって東アジアの国々に運ばれていました。当時、ヨーロッパの人々も、金や銀、香辛料などを求めて東アジアの貿易に加わるようになっていました。こうして東アジアとヨーロッパの間で、ものだけでなく、文化や人々の交流もさかんになっていきました。



15

「天秤ふいご」は、砂鉄を溶かす炉の中へ空気を送るため、足でふむ装置です。「ふいご」をふむのは大変な作業だったので、ふむ人は１時間ずつ交替していました。この「ふいご」をふむ役名がもととなっている言葉は、次のうちどれでしょうか？

答えは「ウ」です。

粘土で作った炉で、たくさんの砂鉄を溶かすには、炉の中にいつも空気を送り、木の炭を燃やして高い温度を保つ必要があります。

「天秤ふいご」は、炉に空気を送るための道具です。明治時代に使われていたと考えられています。昔の絵図に残っていた設計図をもとにして、展示している「天秤ふいご」が復元されました。



16

島根県津和野町の弥栄神社では、７月の祇園祭において、ある鳥に似せた衣装を着ておこなう舞があります。その鳥とは、次のうちどれでしょうか。

答えは「イ」です。

鷺舞は古くは京都の祇園祭で演じられていたものでした。京都から山口県へ伝わり、そこから室町時代に津和野へ伝わりました。サギの姿をしているのは、「織り姫と彦星が天の川にカササギの橋を渡して会った」という中国の古い言い伝えに由来しています。



いくつ正解できたかな?
また古代出雲歴史博物館にあそびに来てね！

